
失くしたものは？

鬼羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失くしたものは？

【Nコード】

N8942S

【作者名】

鬼羅

【あらすじ】

白夜叉処刑の命を受けた真選組。そしてその白夜叉とは銀時のことだと知った真選組は万事屋へと向かう

前編（前書き）

鬼羅です。

今回のお話は2つに分けてやらせていただきます。
相変わらずの文章ですが、大目に見てやってください。

前編

「攘夷戦争での伝説の武神、“白夜叉”を処刑しろ」

土方：「白夜叉…ねえ。」

雨が降る江戸の街をなんの情報のないままブラブラと歩く

白夜叉処刑の命を受けたのは真選組の3人、近藤、土方、沖田だ

山崎：「副長！白夜叉の件なんです…。その正体が、わかりました。」

土方：「本当か!？」

山崎：「驚かずに聞いてください…。白夜叉の正体は…」

万事屋の旦那だったんです。」

近藤・土方・沖田：「……………!？」

土方：「おいおい、冗談よせよ。…なんであいつが…」

沖田：「そうでい、証拠もねえってのに…。」

山崎：「その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿はまさしく夜叉

…そのフリーズはご存知ですよ？俺達が武州にいるとき
なんども耳にしたものです。もちろん、

これだけで旦那と決めつけているわけじゃありません

俺達を上回るほどの戦闘能力…銀髪。

攘夷戦争に参加していた桂と一緒に街を歩いていたという

情報もよく入ってきます。

これだけで十分な証拠となるはずです。」

土方：「……わかった、今から確かめに行くぞ。」

そう言って歩きだした

沖田：「……土方さん…これでもし旦那が…白夜叉だったら

どうするんですかい？」

土方：「……斬る。」

短く返すとさつたと歩いて行ってしまった

―万事屋―

銀時：「ああ、今日も雨が…」

新八：「そうですね。」

神楽：「じめじめしてて鬱陶しいアルなんとかしろよダメガネ。」

新八：「いや、無理だから。」

すかさずツツコミを入れる

天気の子のせいか会話がなくなり部屋にはテレビの音だけが響く

銀時：「なんか妙な胸騒ぎがすんだよな…」

小さな声で呟く

新八：「銀さんもですか？」

銀時：「え、なにお前も？」

声が聞こえていたことに少し驚いた銀時

神楽：「私もネ…おかしいヨ3人そろってこんな…」

ガラガラ

玄関の扉が開く音がした

土方：「邪魔するぜ………万事屋…いや、白夜叉。」

このとき銀時は玄関の鍵を開けっぱなしにしたことに少しだけ後悔した

前編（後書き）

ありがとうございました！

後編

新八、銀時、神楽の順で椅子に座る向かいには真選組の4人

銀時：「んで、なんのよう？」

静かな部屋に銀時の声が響いた

土方：「しらばつくれんじゃねえ、てめーが白夜叉に間違いないな。」

銀時：「……………だったら？」

いつも違い、冷静で冷たい雰囲気だ、それに戸惑いを見せながらも心配そうに銀時を見つめる2人

土方：「……………斬る。」

スウッと刀を抜き構える

近藤：「上からの命でな……すまないな。」

銀時：「別にてめー等のせいじゃねえよ……ただな、俺だって死ぬわけにやいかねえ。」

近くに置いていた木刀を構えると沖田がむかってくる

ガキイイイン

銀時：「なかなかやるねえ沖田クン？」

沖田：「ふざけないでくだせえ！」

鏑迫り合いになる先に中心をとったほうが勝ち

沖田：「旦那！これだけ教えて下せえ！どうして攘夷なんかに…」

銀時：「そんな昔のこと…もう覚えてねえよ」

沖田：「……旦那？」

寂しそうにいった銀時を不思議に思いながらも、距離をとる

なかなか決着がつかない2人を見て土方が動く

土方：「おい、山崎！その餓鬼共捕まえとけ！」

山崎：「え、は、はい！」

戸惑いつつも刀を抜き、2人の首に向ける

身動きが取れなくなる

銀時：「おい！なにしてんだてめー！刀あしまいやがれ！」

少しの動揺をみせる

土方：「どうした？さっきと別人じゃねーか。白夜叉。」

ズキッ

銀時：「俺をその名前で呼ぶんじゃねえ！！」

狂ったように刀を振るいだした銀時、沖田と土方も避けるので精一杯だ

そんな状況の中、土方が体勢を崩し尻餅をついた

沖田：「土方さん！！！」

声をかけるがもう手遅れ…その場にいる誰もが思ったそのときだ

神楽：「銀ちゃんやめてえ！！」

神楽の声が響いた

銀時は気力を失ったかのように木刀を落とす

そして新八と神楽を見る

刀を向けられたままになっいていたが怪我はしていないようだ

だが、銀時を見る2人の目が怯えていた

ズキッ

頭が痛い

自分を見る目が過去の自分に向けられていたものと全く同じだった
とくに自分の大切な者にそんな目で見られたとなっては

普段の自分を見失いかけている今の自分にとって1番辛いこと

過去に護れなかったという思い、そして怯え、逃げていく仲間達

そんなことをふっと思い出した

今の新八と神楽も自分のことを恐れ、逃げていくのではないかとい
う不安からか…

土方が持っていた刀を奪うと、自分の胸に向ける

土方：「…おい…お前、なに…」

神楽：「銀ちゃん…やめてヨ。ねえ？」

新八：「そうですよ…へんな冗談よしてください。」

3人の言葉を見殺して銀時が

銀時：「……わりいな……こんな別れ方で……ごめんな……あと、今までありがとう。」

神楽：「銀ちゃっ」

グサッ

銀時が倒れた

意識はない…

土方があわてて脈を確かめる

土方：「……死んでやがる……」

新八：「そんな……」

神楽：「銀ちゃん……ぐすっ」

沖田：「旦那…俺達旦那の中にあつた踏みこんじゃいけないところまで

入っちゃったんですかねい。」

土方：「そうみたいだな……」

雨の降る音が聞こえるなか、消えた銀色を思い涙を流す

失くしたものは？

銀時だけか？いいや、その周りにいた者の感情えがお

後編（後書き）

ありがとうございました。

訳わかんないですね…

簡単言つと死にネタが書きたかっただけです

いろいろとすみませんでした。

長編、“哀しき夜叉”のほうもよろしくお願いします。
本当に、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8942s/>

失くしたものは？

2011年10月8日23時13分発行